



「農漁民」は「半農半漁」を超えられるか

安室 知 (非文字資料研究センター 研究員)

1. 生業類型としての「半農半漁」

海に接して立地する集落をこれまで歴史学の研究者はなんと呼んできたであろうか。生業に注目すれば「漁村」ということになるし、そうした生業の一面だけを見ることへの批判から「海村」といったりもする。また、立地に注目して「海付きの村」という場合もある。

最近、私は「海付きの村」という概念を用いることにしている。しかし、私の場合には、海付きの村という発想は、たんに立地として海に面していることだけを意味しない。また、発展段階的に漁村（漁業）に特化する前段階としての村を指すものでもない。

川名登らによる文献史学と民俗学の学際研究（川名ほか、1975）は、「漁村」とはいったい何なのか、といった疑問から出発しているが、それによる規定では「そこが海に面しているということでも、たんに魚がとれることでも、漁業生産の量の多少でもなく、そこに漁業生産があり、それが村落の構造に何らかの特質を附与しているとき、それを漁村という」とする。用いる用語こそ、海付きの村とは違い、上記のような考え方を筆者は基本的に支持したい。

これまで、漁業経済史や漁村社会学では書き上げなどに記録として残る生産高や納税（貢租）高をもとに、漁業生産と農業生産との割合または漁業への経済的依存度を指標として海付きの村の分類がなされてきた。そうした研究においては、漁村の一つの類型として「半農半漁」が位置づけられることが多かった。

たとえば、「海辺地方－主農従漁、端浦－半農半漁、本浦－純漁」（羽原、1954）や「純漁村部落、半農半漁村部落」（山岡、1965）、「純漁村、主農従農村、半農半漁村、主農従漁村、純農村」（青野、1953）などがその典型である。そうした1950-60年代に確立した「半農半漁」の概念は、その後も行政文書はもとより、人文科学や社会科学において広く継承されている。

農林水産省で採用する「半農半漁村」の英訳は、a

farming and fishing village である（農林統計協会編、2005）。しかし、これでは定義としてもまた実態概念としてみた場合もほとんど意味をなしていない。社会経済史学や漁村社会学といった学界や農水省などの行政において重要な村落類型のタームとされるに足らず、お粗末であるといわざるをえない。

つまるところ、村落類型としてみた場合、「半農半漁」という括り方は、統計上の生産高では割りきれない生活の実態に対して、明確に概念規定することができず、まただからといって無視することもできないがための窮余の策であるように感じられる。むしろ生業の実態としては、農と漁の比率は半々という状況にはなくグラデーションをなして広い幅を示している。また、農と漁の複合の様相も、たとえば性差や年齢差による役割分担とか、集落内における家ごとの役割分担などさまざまなものがあり、単純なグラデーションではない。それをあたかも割り切れたかのように「半農半漁」という概念をつくり、そこに押し込めてしまったといえる。そのため、本来は多様な相を見せる生活の実態が覆い隠されてしまったのである。

2. 「農漁民」の発見

歴史学や社会学、地理学において、研究上の概念として漁村や漁民を設定しつつも、その生活は漁業だけで成り立つものではないという指摘はかねてからある。主として村の書き上げや経済統計等の資料を用いて、それは示された。

しかし、その実態は「半農半漁」といった括り方に示されるように、研究の多くは単なる生業技術の組み合わせの指摘にとどまるものであった。生業戦略という視点から、その実態として、人が農や漁またそれ以外の生業をいかに組み合わせているか、その様相にまで踏み込んで議論するものはほとんどなかった。言い換えるなら、従来の研究は村や家を単位にして、そこで営まれる生業のレパートリーを挙げただけのものであった。

そうしたなか、アチック・ミュージアム（日本常民文化研究所）の流れをくむ河岡武春と辻井善弥はそれぞれ違ったアプローチから「農漁民」の概念を提出して注目される（河岡、1976・辻井、1977・1980）。

研究概念としては、一見すると稚拙にさえ思われる用語であるが、その持つ研究史上の意義は大きい。当然、経済性にのみ注目して研究者が創り出した「半農半漁」といった便宜的な概念とは根本的に発想や考え方を異にする。つまり、「農漁民」は経済性だけでなく、生活全体をトータルに捉えようとするものであり、かつフィールド・ワークにより実態に迫ることで到達した概念であることが重要なのである。

河岡はおもに日本海岸にある潟湖周辺の低湿地に生きる人びとの生活から「農漁民」を発想している。体系化されずに終わったが、河岡の低湿地文化論の根幹をなす概念であるといつてよい。「漁民の水鳥猟」（河岡、1977）という論文にそれは象徴される。当時の民俗学における技術中心の生業論においては、漁民は魚を捕るものであり、水鳥を捕るのは猟師であるというのが常識とされる中であって、ほとんど無視されてきた生業複合的な視点を提示している。

それに対して、辻井はおもに三浦半島の磯根地帯に生きる人々に焦点を当て、台地の畑作と谷戸の稲作そして海辺での磯漁という複合的な生業のあり方を象徴させて「農漁民」を発想している。従来、磯漁はアマ（潜水漁）によるアワビ採取といった一部の漁業活動にしか注目されてこなかったが、その実態は日常的な自給的漁撈活動にあることを明らかにし、そこに光を当てたことは研究史上大きな意味を持つ。

この二人が、潟湖周辺と磯根地帯という日本列島内のまったく違った海浜環境に暮らす人びとの生活から「農

漁民」という概念に到達したことは、海付きの村における基本的な生計維持方法として「農漁民」という概念が普遍化の可能なものであることを示唆している。

磯根や潟といった水界に隣接して暮らす人びとの生業をつぶさにフィールド・ワークし、「農漁民」と概念化することによって、その基本的な生計維持のあり方が複合生業にあることを明らかにしたことは重要であろう。その後も、少数ながら何人かの研究者により、海付きの村の複合生業について事例研究が積み重ねられてきている。こうした「農漁民」が作る村は当然「漁村」や「半農半漁村」であるわけではない。

「農漁民」の概念を洗練させることで、海付きの村の生業研究は「海村」論や「半農半漁」論を超え、新しい段階を迎えるようになるかもしれない。その可能性を私は模索してゆきたいと考えている。

引用参考文献

- ・青野寿郎 1953 『漁村水産地理学研究1・2』古今書院
- ・河岡武春 1976 「低湿地文化と民具（1）（2）」『民具マンスリー』9巻3・4号
- ・河岡武春 1977 「漁民の水鳥猟」『民具マンスリー』10巻4号
- ・川名登、堀江俊次、田辺悟 1975 「三浦半島における近世漁村の構造」村上直編『近世神奈川の研究』名著出版
- ・辻井善弥 1977 『磯漁の話』北斗書房
- ・辻井善弥 1980 『ある農漁民の歴史と生活』三一書房
- ・農林統計協会編 2005 『農林水産統計用語事典2005改訂』
- ・羽原又吉 1954 『日本漁業経済史 上・中一・中二・下』岩波書店
- ・山岡栄市 1965 『漁村社会学の研究』大明堂



長崎県対馬市豊玉町廻地区の航空写真
港、集落、その背景に伸びる畑、西側の2本の谷筋に広がる田、周囲の山林、これらが1つのセットとなって廻地区は成り立っている。
(写真：対馬市豊玉支所提供 キャプション：橘川)